

越中万葉



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなごかる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのびります。

オミナエシ

この写真は著作権の関係で表示できません。
写真は冊子でご覧になることができます。
担当営業までお問い合わせください。

秋の田の

穂向見がくろく

わが背子が

ふさ手折り来る

をみなへしかも

揮毫 中尾 哲雄

秋の田の 穂向見がてり わが背子が
ふさ手折り来る をみなへしかも

大伴家持(巻十七三九四三)

【歌意】秋の田の稲穂の美りくあいを見回りがたがた、あなたが
どっさり手折って来てくださったのです。このオミナ
エシの花は。

《解説》

天平十八年(七四六年)※八月七日夜、国守の館では家持が赴任して初めての宴が催されました。歌に詠まれているオミナエシの花束は大伴池主が持参したものです。オミナエシは秋の七草の一つで、小さな黄色い花をたくさんつけます。池主は家持の部下の掾(三等官)で、同じく都から派遣されていました。

当時の官人の重要な仕事に口分田の管理や農業の奨励がありました。秋の田の穂向見がてり「は、池主が職務に励んでいると褒めたと解釈できます。これに対し池主は、「をみなへし」咲きたる野辺を行きめぐり、君を思ひ出 たもとほり来ぬ(あなたを懐かしく思い出しているうちに、自然と回り道をしてしまったので)と謙遜しつつ再会の挨拶を返しました。

「背子」は女性が夫や恋人に使うことが多い言葉ですが、池主への親愛の情を恋歌めかして表現しています。家持と池主は越中で多くの贈答歌を交わしています。池主が越前に異動した後も交流は続き、万葉集には親しい歌のやりとりが残されています。

※現在の館では八月三十日



高岡市伏木一宮 十間道路(国道415号)沿い